

「長島の感性を磨く旅」 研修報告

7月31日から8月4日の5日間、東京・山梨県清里・長野県川上村・小布施町・石川県能美市・氷見市のさまざまな「まちづくり」を視察しました。

「地方から価値を作る」ためにはどうすればいいか。川添町長、井上副町長、町議会、東町漁協、商工会、鹿児島相互信用金庫、役場職員ら20人が参加した「長島の感性を磨く旅」の概要を報告します。

市立・美術館

東京おもちゃ美術館

東京おもちゃ美術館は、認定NPO法人日本グッド・トイ委員会が、2007年に廃校となった新宿区立四谷第四小学校の校舎へ移転・運営している美術館です。体験型ミュージアムとして、年間約12万人以上の来館者を迎えています。

今では、成功している当美術館ですが移転当初は、さまざまな課題を抱えていました。しかし、次のような工夫で解決してきました。



↑東京おもちゃ美術館

- ・収入増⇨入館者増のために、平日の入館者増に着目。赤ちゃんにターゲットを当てた「赤ちゃん木育ひろば」を整備。また、積極的に幼稚園、保育園の遠足を誘致。
- ・体験型ミュージアムゆえに「ヒト」の存在が重要なことから「おもちゃ学芸員」システムを導入。通常のボランティアスタッフよりも負担の大きい資格制度のような形をとり、高い意識を持つ

「初期費用約1億円」の調達
 ・「一口館長」制度を設立し、多くの市民から少額の寄附を募る仕組みを整備。寄附者には名前入り積み木の永久展示といった特典を付け、寄附しやすい環境の整備。

・「設立応援債」という一口50万円からの公募債を設け、理事や知り合いなどから募集。
 ・「一口館長」制度で信頼を得、金融機関からの「借入」の実施。「運営費用」の捻出

・収入増⇨入館者増のために、平日の入館者増に着目。赤ちゃんにターゲットを当てた「赤ちゃん木育ひろば」を整備。また、積極的に幼稚園、保育園の遠足を誘致。

東京おもちゃ美術館は現在、「木育推進事業（ウッドスター）」に力を入れています。この事業は、「木」を真ん中に置いた子育て・子育て環境を整備し、すべての子どもたちが人生最初のステージを、木の温もりを感じながら、楽しく豊かに送ることが出来るようにしていく取り組みで、「子育て支援」、「環境保全」、「地方創生」の3つの利点が生まれるとのことでした。



↑赤ちゃん木育ひろば

清里・萌木の村

山梨県清里は八ヶ岳の南麓に広がる高原地帯であり、開拓によって開かれた土地です。戦後には観光業振興の影響を受けて発展し、昭和50年代に「清里ブーム」が起こり、関東圏から多くの観光客が訪れました。押し寄せる観光客目当てのペンションや店舗が乱立しましたが、バブル崩壊が起きるとブームが沈静化。最盛期に作られた店舗の閉鎖が相次ぎ駅前通りは閑散とし皮肉にも「廃屋通り」と呼ばれるまでになりました。当時は40件あった民宿も現在は1軒も残っていません。

それでも唯一気を吐く観光名所が「萌木の村」です。この施設は、現在観光庁の観光カリス



↑パリ博覧会の名作「リモネール 1900」

卒業生がこの学校で結婚式を挙げるのを夢見て

川上中学校

川上村立川上中学校は、「川上村は、レタスなどの野菜栽培だけでなく、林業も村の柱。レタス栽培が盛んになる前は、住民の多くが林業で生計を立てていた。その林業の文化を、子どもたちに伝えたい。」という願いのもと、「川上村産の唐松」を中心と造られた校舎で、次のような特徴がありました。

- ・川上村産の唐松をふんだんに使い、村有林37haから切り出された1035㎡もの木材を、建物の構造、外装、内装に大量に使用。
- ・建築材としての利用のみならず、生徒の机や椅子などの家具も村産の唐松を利用し、教職員も机、会議テーブル、ランチルームのテーブルなどには天然唐松の練り付けを施工。
- ・エコスクールの認定を受け、文部科学省、NEDO、林野庁、長野県、国土交通省から補助を受けた複合多様な施設。

・2005年の愛・地球博に出展されたグローバルコモン2に展示されたオブジェ（作品名「プレイヤーエイリアン」）やカナダ館で使用されたダグラスファー（米松）の寄贈を受け、生徒のみならず保育園児やデイ

サービスに通うお年寄りなど、村民の憩いの場としても利用できる公園広場を整備。
 ・村有林交換プロジェクトによる、大桑村のヒノキ、根羽村の杉、そして川上村の唐松が交流の証として、ランチルーム横に配置。
 平成20年に完成したこの校舎は、建設に関わった人々の間で「祖父母が植え、親が育てた唐松で、孫が学ぶ新校舎」と言われ、この思いを込めて造られた新校舎は100年持つと言われている。



↑村産の唐松で造られたランチルーム

～長島の感性を磨く旅～



↑船木上次 村長

で、そのようにして残った記憶は、少なからずその後の未来に影響を与えます」と言われました。「CDやカーステレオなどから録音された音」と「実際に聴く生の音」は、全く別物であるということ、確かに私たちはCDで聴く音楽に拍手はしないという話でした。館を出た後、この施設の代表である船木上次氏の話聞きま

した。
 船木氏は、清里の急激な開発と没落を全て目の当たりにしながらも、清里を本物のホスピタリティと感動を与えることができる地域文化のある観光地にするべく、人材育成やパレエコンサートの開催など地道に独自の活動を続け、流行に流されず地元の活性化に貢献しています。船木氏が流行に流されないのは、「知識と技術があっても素人はセンスがない。儲かる事よりも儲からない事によって得られる事の方が大事だ」というモノ

サシが必要。価値を作れる人が価値を作れない人を支配する。言わば価値の創造者が勝ち組なのだ」という哲学を持っているからです。それは清里開拓の父であるポール・ラッシュユ氏の「Do your best, and it must be first class（最前を尽くせ。しかも一流であれ）」という言葉を実践した結果の賜物であると感じました。

また、夜は「清里フィールドパレエ・コンサート」を鑑賞しました。これは、船木氏が「田舎にいても本物の芸術に触れて感動してほしい」という願いのもと、1990年から始めた野外での本格的なクラシックパレエ公演です。「田舎だからと二流ダンサーだけでは必ず飽きられる。一流のメンバーで開催したい」という信念と、「清里でしか見れない、清里の自然を最大限に生かしたい」という熱い思いから始めたこの公演は当初、30人程度の観客しか集まりませんでした。回を重ねるごとに観客は増え、入場者数8500人にも上るなど、世界でも類を見ない屋外パレエ公演にまで成長しました。その日の夜は、実際にフィールドパレエを鑑賞し、「一流の芸術に触れて人は感動する」機会を持つ大切さを実感した夜となりました。



↑パイプオルガンも設置している音楽室



↑プレイヤーエイリアンが迎える川上中学校